
弱くても気高く

逢里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弱くても気高く

【Nコード】

N16660

【作者名】

逢里

【あらすじ】

退屈を拒み、ワクワクするような日常を求める主人公「七海 詩遊」はいつもの日常を嫌っていた。

そんなある日、詩遊の友達「園田 凌太郎」がとある廃校に出現する不思議な扉の話や詩遊に持ちかけた。

その不思議な扉は別の次元へと飛べる、そんな扉らしい。

その日の夜、他の友達を連れてその廃校へ行く事に

恋愛あり、戦闘ありのファンタジー系です。

アニメやゲームの世界等に行きます。

退屈

「あー、退屈。」

いつもの日常、それは俺にとって「退屈」の二文字で表現される。いつも思う、何か面白い事は起きないのか。と

何かワクワクするような、そんな出来事は起きないのか

数日後、俺の友達1、園田凌太郎が

「なーなー、知ってる？とある廃校に不思議な世界にいける扉があるのを！」

「知るか、そんなもん。」

「えー、だつてお前、毎日退屈過ぎて嫌、つて言つてただろ？だから教えてやったのにさー。」

毎日退屈なのは事実。でもそんな話、信じていいものか。

「あ、話を続けるとだな、その扉は夜中じゃないと行けないんだ。だ・か・ら！今夜行つて見ようぜ！！」

正直、面倒だし、行きたくない。

でも夜中、退屈するよりマシ、と俺は考えた。

「…俺は別に構わない。」

「よっしゃー！他の奴らも連れて行くこうぜ！！」

今夜、俺はその廃校に現れる「不思議な扉」があるか確かめに行く事になった。

退屈（後書き）

この小説にはプロローグが存在しません！

どうも、逢里です。

もうなんか自分でもわけわかんないです。

頑張って続き書ければいいなっ！

一応テイルズシリーズの世界へ、ということですが、私の気まぐれスキルで他のアニメなども追加されるかもしれません。

夢…じゃない(前書き)

2話目です。

やっとテイルズシリーズの方が登場してきます。

そしてやたら長い

それでは、どうぞー！

夢…じゃない

約束通り、俺たちは夜中廃校へと向かうのであった。

「うう…廃校って、不気味ではありませんか…？」

怖がっているのは朔瀬 日和。

「あら、いい雰囲気じゃないかしら？」

面白がっているのは日和の姉、朔瀬 叶。

「うむ、絶対出そうな感じだねっ。」

よくわかんないのが魔城 葉子。

「…眠いです。」

緊張感のないのが黒河 真月。

「何か出たら、反射的にぶん殴るね。」

素晴らしい笑顔で、そう言っているのが白凧 悠斗。

「とりあえず、さっさと済ませて帰ろっ？」

ニッコリ笑顔で冷静に言ったのは俺の双子の弟、七海 愁哉。

「絶対ここには不思議な扉があるっ！」

この件に関して、言い出しっぺの園田 凌太郎。

そして俺。

「んじゃ、行くっぜ。」

さっさと済ませてベッドで寝たいだけの俺。

しかし、これから沢山の物語を実際にすることになるなんて思っていないから、こんなことが言えるんだ。

今更だが、こんなの参加しなければよかったと思う。

……

早速、俺たちはその廃校に入り「不思議な扉」を探し回った。でも、その廃校には「不思議な扉」は無かった。

「やっ、やっぱり存在しないんじゃないんです？」

「そうだね、何処にもないし。」

「な、なかったのか……。くそっ、あるって信じてたのにっ！」

期待を裏切られた凌太郎は真夜中に騒ぎ出した。

「うるさいわね……さっさと帰るわよ。」

「あつ、ちよつ、待って！お願いだから！！」

凌太郎が急いで叶を追いかける。
後ろから俺と日和もついていく。

「結局なかったんですね、不思議な扉。」

「そつだな、まあ、現実味のない話だから。」

そんな話をしながら、叶たちを見失わない様に、少し早歩きでついでいく。
その時。

こつちだよ

いきなり聞き覚えの無い声が聞こえた。

「日和、何か聞こえなかったか？」

「はっ、はいっ…聞こえました…。」

日和も聞こえたらしく、震えて俺に抱きついているのがわかった。

「ちよつと、謎の廃校で何いちゃついているのよ。許さないわよ。」

「違う、何か聞き覚えの無い声が聞こえてさ、それで抱きつかれてんの。」

「はあ？てか、聞き覚えの無い声って何よ。」

叶は信じてないようだ。
そしてまた

こっちだよ

その「声」が聞こえた。

「…今の声が聞こえたのかしら？」

「そう、今の声。」

暫くずっとその声が聞こえる様になった。
毎回、毎回、「こっちだよ」と言っている。

「多分、何かあるんでしょうね。行きます？」

「行こうぜ、もしかしたら「不思議な扉」があるかもしれないし。」

俺らは「声」がする方へと向かった。
すると着いたのは

3 - A

「…うね…。」

叶がさっさとドアを開け、3 - Aに入る。

真月、凌太郎：他の奴らも入り最後に入ったのは俺と日和だった。

「…っ、怖くないんですか…？」

日和は俺に抱きつきながら言った。

「別に。こんなの、早く終わらせて帰るだけだ。」

「そっ、そうですね。早く終わらないかな…。」

叶たちが部屋を探しても、不思議な扉はなかった。

「あら、やっぱりないのねえ。」

「んじゃ、帰るか。」

そっいつてドアを開けたその時。

「うわっ!?!」

「きゃあっ!?!」

ドアを開けた瞬間、何かに凄い勢いで吸い込まれる、そんな感覚に襲われ、俺と日和はそのまま吸い込まれてしまった。

何が起きているのか、全く分からないまま、俺の意識が途絶えた…。

………

「…っつう…。」

俺が意識を取り戻した頃、目の前に移る世界はあの廃校では無かった。

目の前に広がるのは広々とした大自然。俺たちが住んでいた「東京」では考えられない世界だった。

回りを見渡すと皆が倒れている。廃校に行ったメンバーだ。まず、起こしにいったのは俺にずっと抱きついていた日和。

「おい、大丈夫か？」

「…ううっ…ここは…？」

日和が目を覚ました。

他の奴らも個人で起き始める。

「わかんねえけど、東京ではないみたいだな。」

「あれ…？あそこに大きな街がみえるよ。」

愁哉は、その場所を指差した。確かにそこには大きな街があった。

「なら、いつてみようよ。ここにいっても仕方がないからね。」

そうして俺たちはその街へ行くことになった。

ずっと歩いていると周辺には変な犬（？）やらマンモス（？）がその辺にいる。

やたら大きい奴もいるので普通の犬（？）ではないことがわかる。

「何なんでしょうね、この世界。」

「知らん、とりあえず、あの街までバレないように行くぞ。」

バレないように、俺たちはあいつらの視界に入らないように街へと向かった。

しかし、それにも限度がある。小さな群れの一匹に見つかってしまった。

「見つかったわね…逃げるわよっ！」

皆、全速力で逃げるが、あんな奴相手に撒けるわけもない。

そして、日和が群れに捕まりそうになっているのがわかった。

「日和、危ないっ！」

「きゃああっ！！」

その時

ファイヤーボール！

突然、後ろから複数の火の玉が飛んできた。

その火の玉は日和を捕まえようとしていた奴に当たった。

これは…夢…なのか？

「全く…危なっかしい奴らね、武器も持たないで外にでるなんてっ
！」

栗色のショートカットの少女が言った。

しかし、こっちはなんの話をしているのか、さっぱりわからなかった。

「ぶっ…武器って…。」

「うるさいわね、助けてやってんだから黙ってなさいよっ！
ヴァイオレットペイン！」

そういつて少女は、みるみる内に群れを倒していく。

「た、助けをいただいております。」

「別に、いいのよ。」

それよりあなたたち、なんで武器を持たないでこんなところいんのよ、死にたいの？」

「そんなことないわ。ただ、気づいたら何故かここにいたのよ。」

「はあ？意味わかんないんだけど。」

その少女は全く信じていない様子だった。

「信じてもらえないようですが、本当なんです。」

「ふーん…とりあえず、私の家に来れば。」

保護ぐらいはしてあげる。」

「さ、さんきゅう…。」

そして。

変な洞窟の様な所の中に、人が住んでいるようだ。
その中に入っていく。

少女についていき、少女の家らしき所の中へ入る。

「ここが、私の家よ。」

家の中は本がたくさんある。何かの研究をしているようだ。

「私は外に行くから、あんたたちはここで待ってて。」

言われた通り待っていること数分…
少女が誰かを連れて帰ってきた。

「こいつらが、あんたたちを保護する奴らね。」

連れてきたのは男3人、女子2人。と、青い犬。

「これから保護もしつつ、旅に出るから、よろしく頼むぜ。」

「…はい？」

「と言っても、そんなに連れて行けねえから2、3人だけな。」

「えっ…ええっ!?!？」

「んじゃ…お前とお前とお前で。」

指差されたのは日和と悠斗と俺。

「…ってことで、よろしく頼むぜ。」

そう、これから、俺らは旅に出ることになったのです…。

夢…じゃない(後書き)

わけわかんなくなってきましたね、作者も同じです

でも楽しかった、*

これからも楽しく書ければいいですな

皆様、最後まで読んでいただきありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1666o/>

弱くても気高く

2010年10月10日19時42分発行